

盲人の単独歩行とその独立性

東京都心身障害者福祉センター 村上 琢 磨

I はじめに

中途失明者はその初期において、できるなら失明を隣り近所の人に知られたくない、知られても人目につきたくない、また訪問者との応対も避ける。外出もできるだけ避け、やむをえず出かける時は、家族または目の見える者と一緒で、単に用件を済ますことのみで終始し、行き帰りの景色や交通経路などに関心を払わないため、再三同じ場所を通過していても周囲の状況を知らないている場合が多いなど、すべての面において消極的で受動的である。

失明者に対するリハビリテーション・サービスに狭義の盲リハビリテーションとして社会適応訓練 (Social Adjustment Training) 課程があり、当センターで実施している。その主な内容はオリエンテーションとモビリティ (歩行)、コミュニケーション、身辺管理、レクリエーションに関する部門があげられる。

この課程を通じ、失明者は残存している機能を最大限に活用して行動の独立をはかることによって心理的にも他の人に頼らず独立していくものであり、またそれがリハビリテーションの目標の一つでもある。

行動訓練の中心をなすオリエンテーションとモビリティ訓練は一般に白杖の操作技術がその主要部分であるように考えられている。しかし、行動の前提となる情報の収集と処理があつてこそ白杖技術が生かされるのであり、このことはオリエンテーションとモビリティ訓練を受けていない盲人が立派に単独歩行を行なっていることから立証される。そこで本稿において瞎眼者や訓練を受けていない盲人が単独歩行 (Independent travel) を行なう際出発前に収集した情報の種類と情報量を明らかにし、行動の前提条件の重要性についてあらためて検討してみたい。

II 白杖を使用せず残存機能を利用して行動する訓練

失明者の Orientation and mobility 訓練は、白杖や盲導犬の訓練に先だつてまず日常生活の場において安全で確実な移動を確立することを目的として屋内で実施される。

この訓練は視覚以外の感覚器、中枢神経系および運動器がそれぞれ独自に機能を発揮するのではなく感覚—運動としての結合関係の確立と、それぞれの状況に応じた行動を行なうための適確な判断力を養うことを目標としたものである。

以下に当センターで筆者が実施している具体的な訓練方法の一部を紹介する。

1. 室内の自由探索（動き方や技術に関することは一切指示しない）。
 2. ドアや窓などに行き元の位置に戻る。
 3. 自室のドアの前でトイレ、食堂、洗面所の各位置を言葉で教える。
 4. 自室より近い順に各位置まで一度案内して元の自室まで戻る（案内の際、特に Human guide t e c. は教えない）。
 5. 実際に自室より近い位置まで往復させる。
 6. 4.5 を各位置ごとに繰り返す。
 7. 理解の（移動できる）状況に応じて順次浴室や指導室（宿直室）および電話のある場所へと自室を中心として移動の範囲を広げていく。
 8. 自室内のドアと物（自分のベッド）との相対的位置関係を言葉で報告させる。（位置の移動のほとんどない物と物。）
 9. 各々の物と物との相対的位置関係を報告させる。（椅子や机など場合により移動する物と物。）
 10. 家具類の数を報告させる。
 11. 部屋の形や大きさを報告させる。
 12. 部屋の形とドアの位置や窓の位置を報告させる。
 13. 家具類の各々の配置をレーザーライターや積木で再現させる。
- 以上の段階では特に方角（東西南北）や移動上の技術および手掛り（cue）に関することは導入せず、本人に自発的に行動しその時点で種々の手掛りなど行動上役立つものを得させることを目的としているので自己流にまかせ、その後実際に行動を通して技術の訓練を導入する。
14. 室内における基礎技術¹⁾
 - イ. 伝い歩き技術を練習させる。
 - ロ. 徒手による軀幹交叉法を練習させる。
 - ハ. 身体の方角づけを練習させる。
 15. 部屋への適応訓練
 - イ. 一般的留意点を説明する。
 - ロ. 入口と物との位置関係を報告させる。
 - ハ. 物と物との位置関係を報告させる。
 - ニ. 物への適応を練習させる。
 16. 落した物の認知訓練を行なわせる。
 17. 乗用車の乗降訓練を行なわせる。

- イ、車への到達練習を行なわせる。
- ロ、車に乗る練習を行なわせる。
- ハ、車から降りる練習を行なわせる。

18. 食卓への適応訓練

- イ、テーブルへの接近する練習を行わせる。
- ロ、テーブルおよびテーブル上の物の確認を行なわせる。

19. 14～18の各基本技術の習得度により広い玄関ホールの移動や部屋に配置されている各家具とドアとの相対的な位置関係を一人で知る訓練に移行する。

20. 聴眼者による誘導法²⁾

- イ、誘導法の基本型を練習させる。
- ロ、狭い場所の通過を練習させる。
- ハ、ドアの開閉と通過を練習させる。
- ニ、階段の昇降を練習させる。
- ホ、着席の練習をさせる。
- ヘ、行動上の社会的エチケットを守らせる。

以上日常生活の基本としての訓練について述べたが、訓練を開始する場合各人のスタートの段階を決めることは非常に大切で難しい問題である。筆者はまず本人とにかく動くことに対する意欲を付ける目的で、言葉や模型を使用しての部屋の内部や当センターの内部などの説明はあまり行なわない。つまり行動しだした初期の段階では物理的環境としての物と物や自分と物との相対的位置関係は報告もさせない。

その後次第に種々の物同志および物と本人との位置および方向関係の把握へと移行し、それに行動が伴うようにする。

個々の訓練生の理解および行動力の程度に応じて種々の基本技術を導入する。

以上は行動上必要な基礎的技術習得の段階で、次に屋外を白杖か盲導犬を使用しての行動に移行するわけであるが、当センターでは白杖を使用して行動する訓練を実施している。白杖操作の技術および訓練の方法については省略する。

III 聴眼者および盲人の行動事例

聴眼者2名、盲人2名があまり行ったことのない地域へ行き、そこで特定の人と会うことや知人宅を訪れるという目的でかけた時出発前に調べたりしたことや途中での苦労話をまとめたもの

である。

1. M.A 35才 女性 大卒 障眼者

行先：東京都練馬区の自宅から港区の知人宅。

出発前に調べたりしたこと：

- イ. 約10年前に2度訪れているので最寄りの駅から知人宅までの地図はわかっていた。
- ロ. 電話番号
- ハ. 電車の乗下車駅名とバス停名。

行く途中で聞いたりして確かめたこと：

- イ. 駅前のバス停の位置を確かめる。
- ロ. 降りるバス停までの数を確かめる。
- ハ. バス降車後、道に迷い番地を確かめる。
- ニ. 電柱や標の番地表示板で知人宅を探す。

2. K.O. 37才 男性 大卒 障眼者

行先：神奈川県 of 自宅から長野県白樺湖の知人宅。

出発前に調べたりしたこと：

- イ. 電車やバスの最終駅と乗り換え駅。
- ロ. バスの行先名と降りるバス停名。
- ハ. 時刻表の地図で全体的な経路を調べる。
- ニ. 電車指定券の購入。
- ホ. 小銭の用意。
- ヘ. バスの到着時刻を知人に連絡。

行く途中で聞いたりして確かめたこと：

- イ. 乗車券購入のため列を確かめた。
- ロ. 電車の指定車停車位置を確かめた。
- ハ. バス停の位置を確かめた。

3. T.T. 40才 男性 大卒 中途失明

失明して約20年 視力0

行先：東京都北区赤羽の自宅から神奈川県の公共施設。

出発前に調べたりしたこと：

- イ. 交通経路（赤羽駅 - 池袋駅間は赤羽線、池袋駅 - 新宿駅間は山手線、新宿駅 - 本

厚木駅間は小田急線)。

- ロ。国鉄新宿駅西口より小田急新宿駅までの経路。
 - イ) 西口を出て左側に小田急新宿駅への昇り階段がある。
 - ロ) 階段を昇り終え、階段と反対側の右寄りに切符売場がある。
 - ハ) 改札口は切符売場の左側
 - ニ) 改札口よりみて一番左側のホームを利用する。
 - ホ) ホームは片側ホームである。
 - ヘ) 本厚木駅はホーム中央部の階段を利用する。
 - ト) 階段を昇りつめ左折し東口改札で待つ。

行く途中で聞いたりして確かめたこと：

- イ。小田急切符売場を確かめた。
- ロ。切符購入のため並んだ列が短くなるつど教えてもらった。
- ハ。改札口でホームを確かめた。
- ニ。ホームに向かって途中で電車までガイドを申し出られた。

4. T.K. 58才 男性 旧中卒 中途失明

失明して約2年 視力、右0.01、左0

行先：新宿区大久保の自宅から同区諏訪の日本点字図書館(日点)(距離2km弱)。

出発前に調べたりしたこと：

- イ。数日前に一度だけ人と一緒にいったことがある。
- ロ。日点の位置は明治通りと山の手線の間で早稲田通りの手前にある。
- ハ。明治通りを自宅と反対側を早稲田通りに向って歩き、消防署を左折していく。

行く途中で聞いたりして確かめたこと：

- イ。前に行ったとおりにいく予定で出発。
- ロ。消防署の角を左折する予定が道を間違え日点への道を聞く。
- ハ。教えられた道がわからず高田馬場駅前に出る。
- ニ。路上の点字ブロックを教えられる。
- ホ。日点への点字ブロックを確かめつつ日点到着。
- ヘ。自宅より日点到着までの間15人以上の人に聞く。

以上4人の人があまり行ったことのない地域へ行きそこで目的を果たすまでの過程を順をおった。

この例にある如く各人とも出発前に必ずしも次にあげるような項目、つまり①行先、住所、電話番

号 ②利用する交通機関の種類、料金、時刻、乗下車駅 ③駅や主な目標となる物との相対的位置関係(略図)の把握 ④所要時間、距離などを十分に調べている訳でないことがわかる。

例えば盲人者M.A.は約10年前の記憶と電話番号、電車、バスの行先と下車駅名がわかっている情報である。またK.O.は相当詳しく調べている。中途失明者T.T.も出発前によく調べている。しかしT.K.は一度の経験といったように十分な情報は入手していないがそれぞれ目的地に着いている駅である。

今回わずか数例ではあるが、つまり屋外の行動において4人の人が出発前に十分な情報を収集して行動が成立しているのではないことがお分かりいただけると思う。情報はまちまちであるにもかかわらず出発後各人がそれぞれの状況に対応して、人に尋ねたり調べたりして他への積極的で能動的な働きかけをおこなうことによって情報を入手し、各自の情報と照合したりする過程が重要なことなのである。

IV おわりに

単独行動の前提として情報の収集は基本的なことであり欠くことのできないものである。しかし実際的には各人により、その種類や量にかなりの差があるがこれは当然である。不十分な情報収集で出発することはできるかぎり避けるべきで十分な情報収集をすべきである。

現実には十分な情報収集は困難な場合が多く、ある程度の状態ででかけ不足分は途中で補いつつ単独歩行を行うことになり、それが単独歩行である。

文 献

- 1) 田中一郎・村上琢磨：盲人単独行動技術の実際、理学療法と作業療法、8、629-634頁(1974)
- 2) 田中一郎・村上琢磨：盲人誘導法の実際、理学療法と作業療法、8、339-342頁(1974)